

平泉の苑池 - 都市平泉の多元性 -

前川佳代

はじめに

都市とは多元的側面をもつものである。都市平泉の一面は、四神相応の地を選び、浄土思想や自らの理念に基づいて創り上げた広大な苑池空間である。ここでいう「苑池」とは現代用語の庭園より規模が大きく、古代都城に付属した「苑」に類似した広大な領域に、山や池、寺や邸宅などを配置した空間を指す。

平泉の苑池は、北は関山、東は北上川、南は太田川に囲まれた範囲（平泉中心区）で、中尊寺境内はもちろんのこと、金鶏山や塔山を背景に、花館廃寺と花館溜池、鈴沢池、毛越寺、観自在王院、無量光院、柳之御所、伽羅御所などが散在している景観をいう。苑池の構想時期は12世紀第2四半期で二代基衡の治世にあたり、金鶏山の設定と、平泉の主な池が造成される。苑池の構成は、北宋の名園「艮岳」に類似する。平泉の苑地の意義は、浄土・神仙世界の具現化、そして王城鎮守という意識であったと考える。当時、日本と交流のあった宋からは文物とともに、宗教や思想が入ってきたことは想像に難くない。浄土思想が加味された苑池空間である平泉中心区を彼岸とすると、北上川をはさんだ東方地区は此岸である。また「平泉」という名前は、その苑池的性格から名付けられたと考える。

私は先に藤原氏三代ごとの都市プランを、検出された遺構の共通方位で三期五段階に分けた際、三代それぞれの理念に従った方位認識でもって都市計画を施行したことを明らかにした（前川 2000）。平泉の苑池空間には、藤原氏の自然景観に対する思想が反映されていると考える。都市は人工物である。都市を造る際、どのような理念をもち、いかに周囲の自然を取り入れ共存してきたのか。「都市と苑池」の現代社会的意義は「都市と自然」である。「都市化＝自然破壊」を連想する現代社会にとって資すべき点は大きいと思う。以下に証明していきたい。

1、四神相応の平泉と浄土思想（第1図）

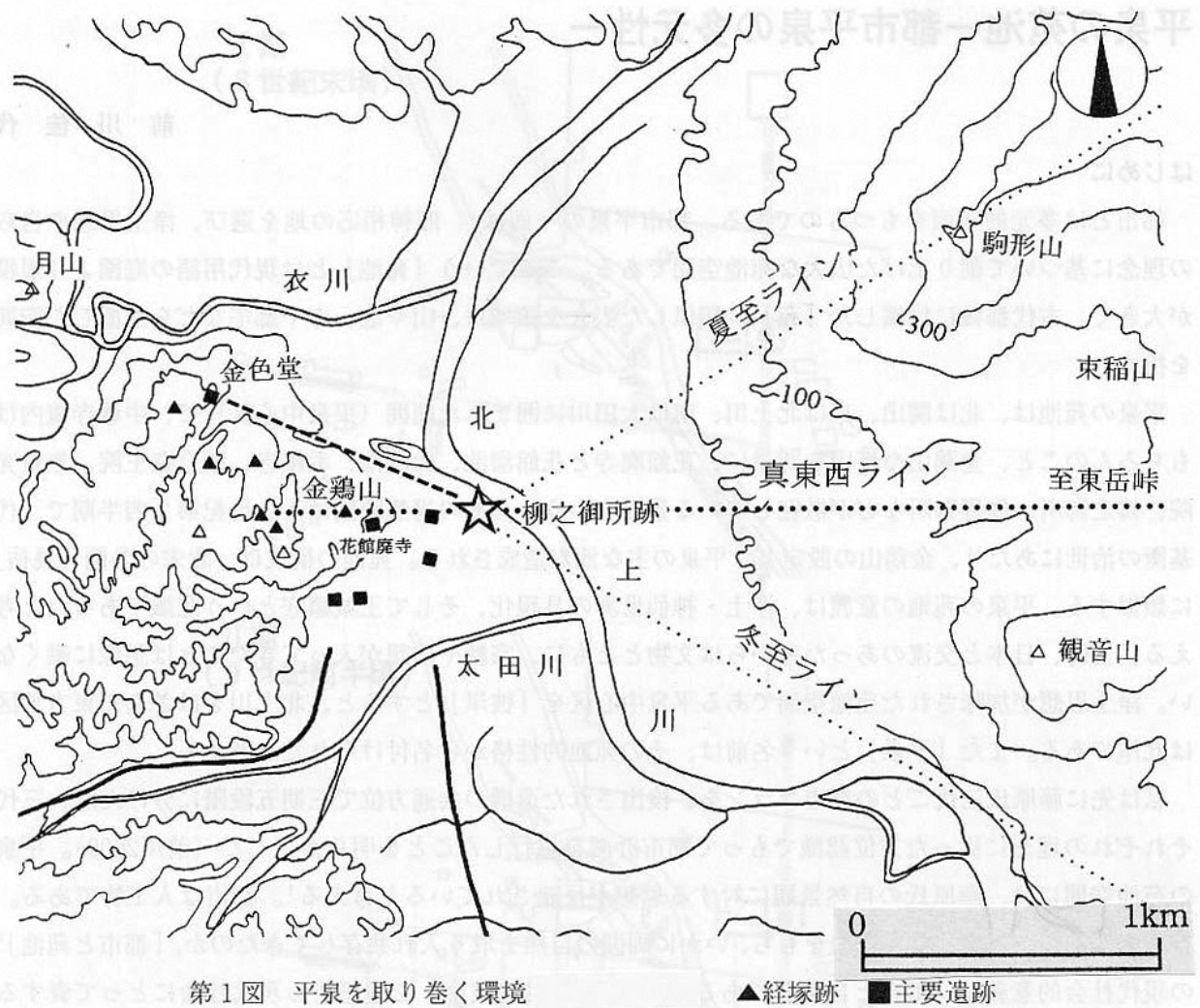
平泉は、四神相応の土地である（高橋 1978、山田 1986）。毛越寺の古鐘銘は次のごとく記す。

左青龍東河流、右白虎有大沢、前朱雀有森、後玄武后在山嶽・・

寺名圓隆、建奥杪中、白虎走西、青龍翔東、玄武遍列、朱雀方沖・・

上の円隆寺梵鐘銘は、貞応三年（1224）と伝えるが、前半は円隆寺の、後半は平泉の地勢を述べている。平泉の地形に照らし合わせると、北に関山（衣川関跡）・高館を背負い、東に北上川、南は広大な湿地がひらけ、西は達谷窟から走る大道がある。安倍晴明選と伝える『籠篋内伝』にいう、玄武・青龍・朱雀・白虎の四神相叶った吉土である。清衡は中尊寺の伽藍造営に際して、「依高築山、就窪穿池、龍虎協光宜、即是四神具足之地也」と「供養願文」で述べており、平泉選地時にも「四神具足之地」を意識したと考えられる。

また清衡は奥州全体を仏国土とすることを理想とした。『吾妻鏡』には、奥州の中心を中尊寺として一基の塔を建て、白河関から外が浜まで一町ごとに黄金の阿弥陀を描いた笠卒塔婆を建てたといひ³、また陸奥出羽の一万余りの村に伽藍を建立したともいう⁴。「中尊寺供養願文」は、四神相応の地となるように、地形を作り変えたことを伝えている。清衡期の平泉は、私見では中尊寺と柳之御所跡付近が中心であった。では平泉の街中は、藤原氏の思想によりどのように吉土・仏国土となるよう改変されたのであろうか。

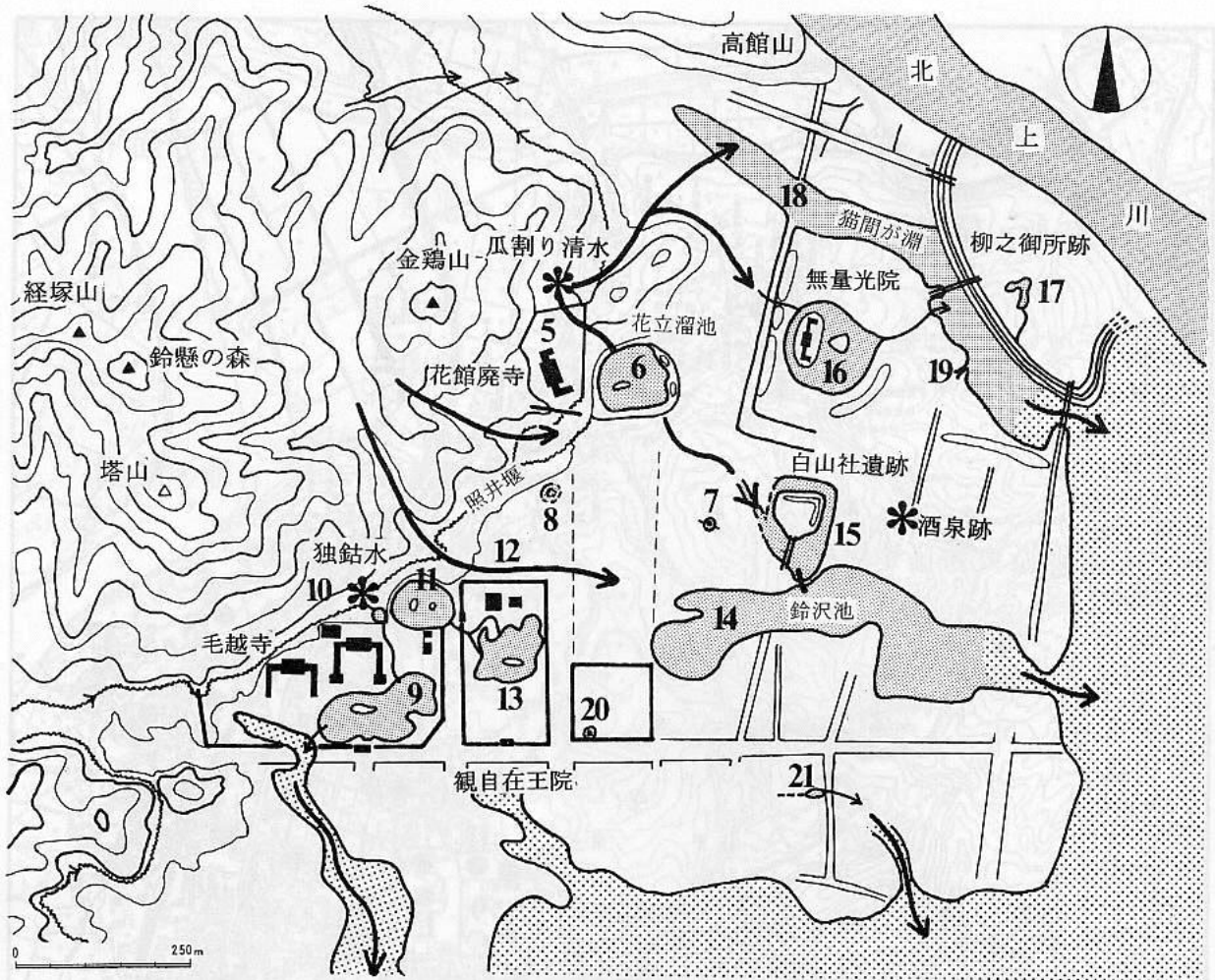


第1図 平泉を取り巻く環境

▲経塚跡 ■主要遺跡

柳之御所跡は、都市平泉の中心拠点である。昨年の52次調査で12世紀第一四半期の土器が一括して出土し、清衡期からすでに存在していたことが明らかとなった。柳之御所跡の真西にひかえる金鶏山は、円錐形のシルエットをもち、頂上には経塚が営まれている。この山は都市計画の基準設定に利用されることから、平泉にとり重要な山であったと考えられる。江戸時代に相原友直が記録した『平泉舊蹟志』(1760)は「平泉鎮護の人工の山」と伝える⁵。弥勒浄土を祈願した経塚が造営された金鶏山は、柳之御所跡からみたとき、真西に太陽が沈むという設定のもとに造られた山と考える。金鶏=酉(西方位)=山である。相対する、真東には高峰・東稲山と観音山の間、東岳峠に当たる。二高峰の間から上った太陽が真西の金鶏山に沈むという光景が想定される。また柳之御所跡からは父祖の廟堂・金色堂がみえる。金鶏山麓の花館廃寺も柳之御所方向の方位をとる。山田安彦氏は、平泉館の位置選定として、夏至方位をとる対岸の駒形山と平泉館ライン、冬至方位をとる東南の石蔵山-平泉館-金色堂ラインを重視する(山田1986)。柳之御所跡は、古代方位信仰と密接に関連して設定されたようである。

金鶏山を含む西の山々から中尊寺にかけての丘陵は、西方浄土を視覚化した聖域であった⁶。金鶏山は『吾妻鏡』に載せる四方鎮守の一つ「西方金峰山」とも想定できる⁷。金鶏山の西には鈴懸の森と称する経塚跡や、現在は削平された経塚山があった⁸。ここから北に向かって中尊寺方面の高峰には経塚が点在する。鈴懸とは山伏が被る衣の名称で、修験道との関わりを想起させる。



第2図 平泉の苑池復元想定図（矢印は流路）

2. 平泉の苑池的構造（第2図）

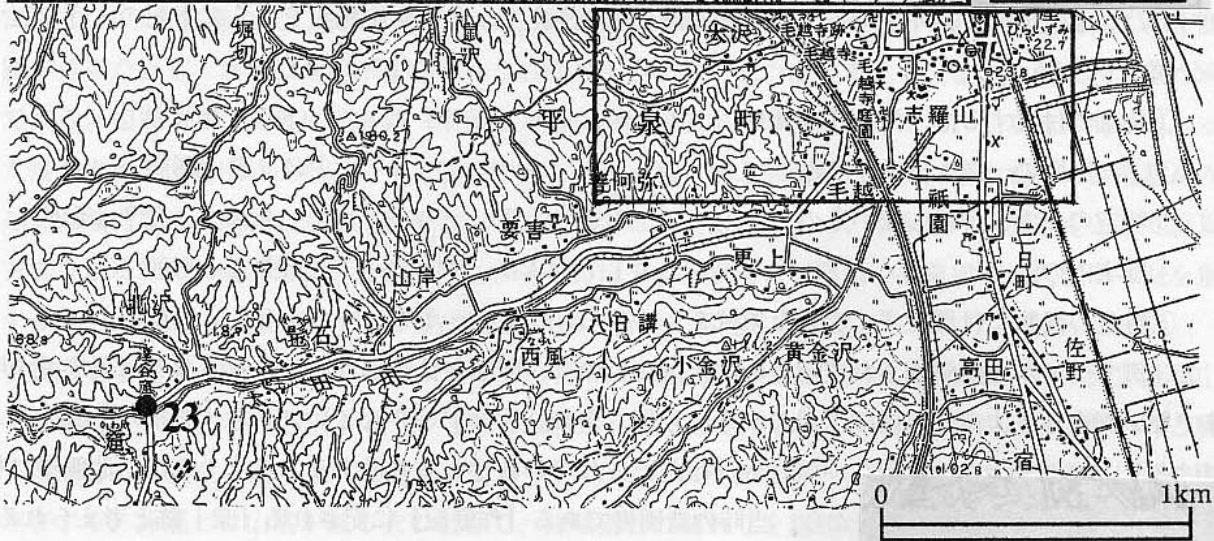
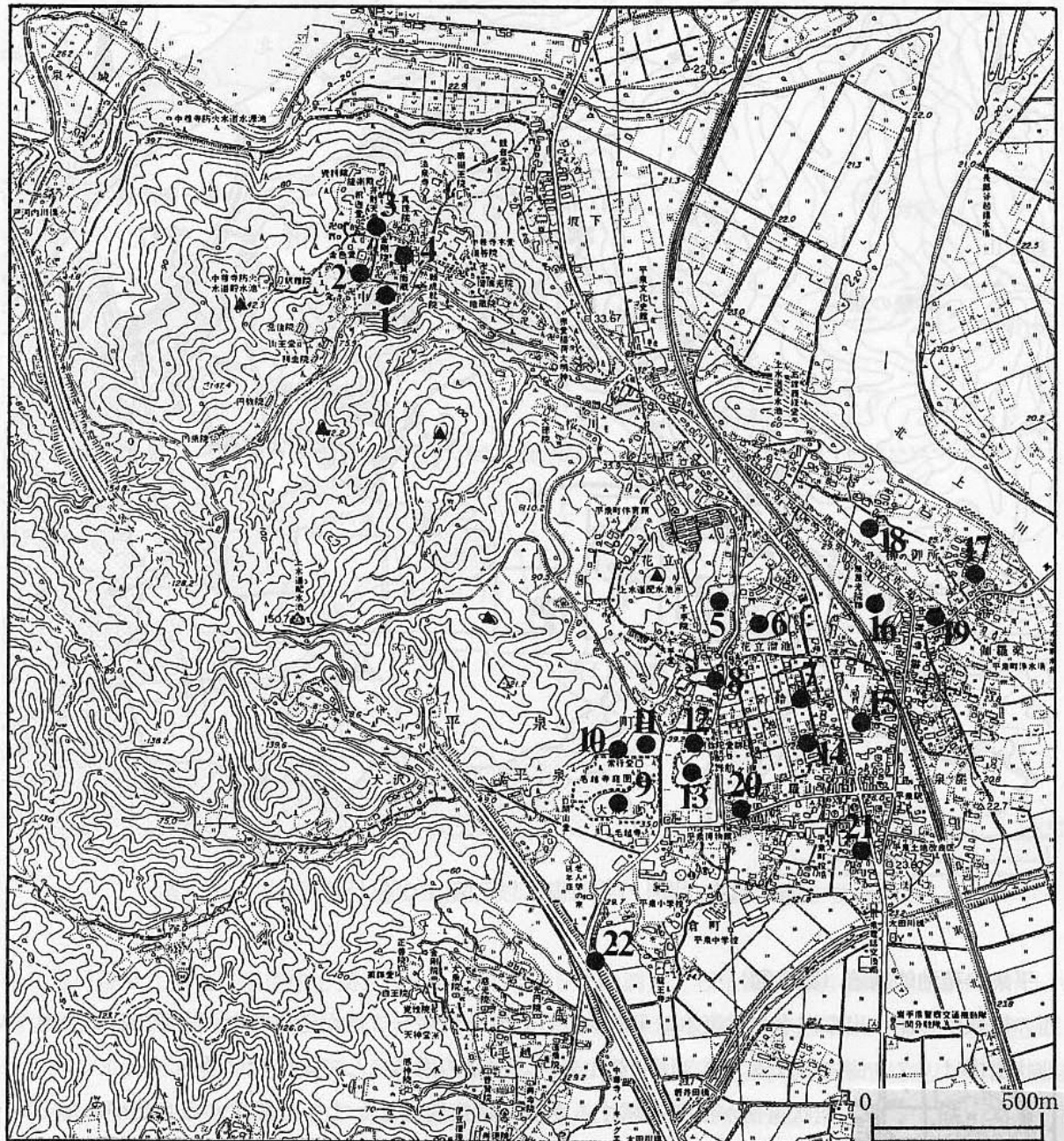
西の聖域から流れ出る沢水や伏流水は泉となり、これを利用して池が造られた。平泉で確認されている池状遺構は、23例にのぼる（第3図・第1表）⁹。平泉の面積にしてこの数は多い。

仲隆裕氏によると、池状遺構が庭園に属するか否かは空間的まとまりを考慮する必要があるという（仲隆裕 1997）。池状遺構を第4図のように形態分類をしたうえで、池の帰属施設をみると五つの分類ができる。

仏堂に付属する池（浄土式庭園）	1・8・9・13・14	A b形態
の庭園の一部を構成する池	2・10	主に B c形態
特定の仏堂に付属しないもの	3・15・23	A a、 ? a形態
邸宅内の池	7・17・20	主に A c形態
特定の建物に付属せず、広大な領域をもつもの	14・18	? c形態

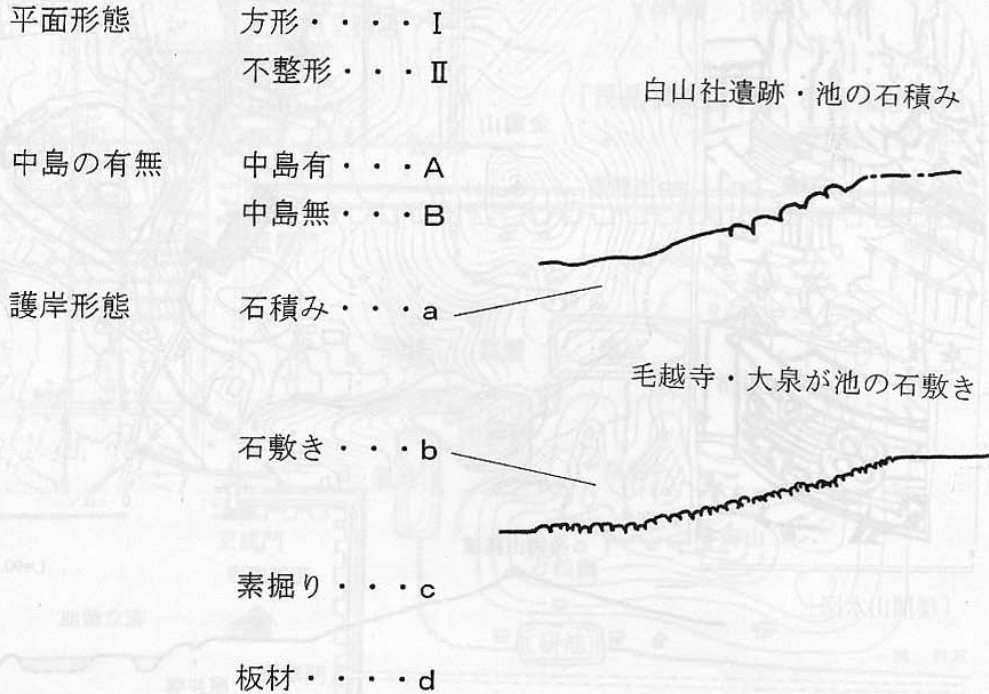
23例すべてが発掘調査されているわけではないので、邸宅か仏堂の判断など帰属施設が明確でない例も存在するが、ほぼ上記のように分類できる。は（A b）にくらべ石積みで護岸するだけあり、傾斜が大きい。現在いずれも神社が祀られていることも共通する。また12は、池側壁に板材を用い、底に玉石を敷くことから、当時の造園書である『作庭記』に記される「泉」跡と考えられる。

庭園は建築とともに住宅の一部を構成するものである。の鈴沢池は街区の中央に位置する点から、街区形成時にはすでに存在していたと考えられ、都市平泉の池ともいえる重要な存在である。



第3図 平泉の池跡・池状遺構位置図

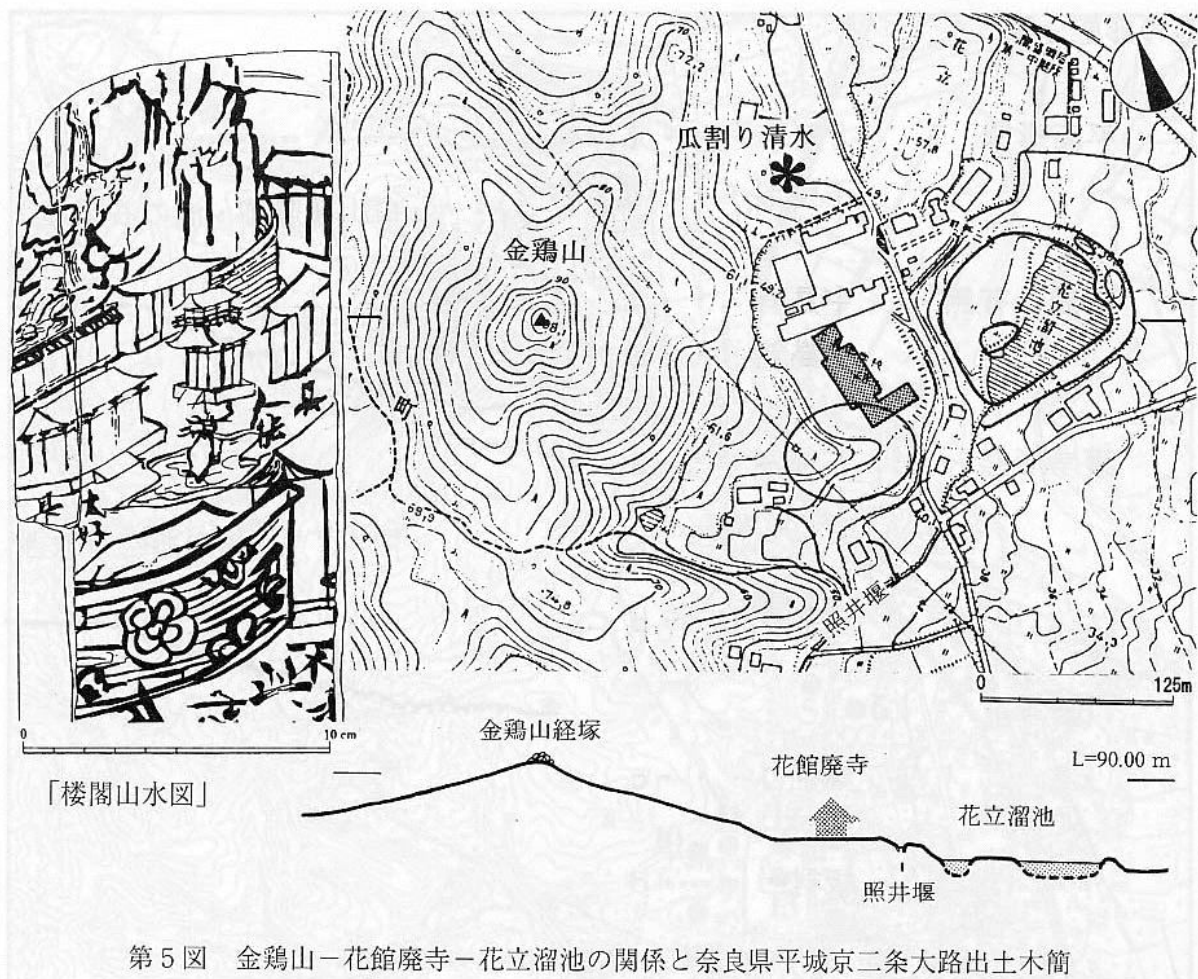
池の形態分類



第4図 池の形態分類図(右図は及川1994よりトレース)

番号	遺跡名	規模(東西×南北)	平面形態	中島	護岸	帰属施設	形態分類	備考
1	中尊寺大池	75m?×100m?	不整形	○	玉石敷	寺院	II A b	
2	中尊寺5 4次池		不整形		素掘り	大池?	II B c	
3	中尊寺三重池(上段)	50m×19m	不整形	○	玉石積	寺院	II A a	高低差をもち、3つ池あり。
4	中尊寺金色院境内池	12m×20m	不整形	?	玉石?	寺院	II?	湿地か?
5	花館遺跡池		方形		素掘り	寺?邸宅?	I B c	鎮守社跡
6	花立溜池	径120m	不整形	○		寺?邸宅?	II A?	
7	花立II-6次池		不整形	○	素掘り	寺?邸宅?	II A c	
8	花立II 1 3次池		不整形	○	玉石敷	寺?	II A b	
9	毛越寺大泉ヶ池	190m×110m	不整形	○	玉石敷	寺院	II A b	
10	毛越寺遣り水奥池	15m×11m			素掘り	大泉ヶ池	II B c	
11	毛越寺弁天池	径90m	不整形	○		寺院	II A?	
12	親自在王院下層池	5.3m×5.4m	方形		板材	邸宅?	I B d	底一玉石敷
13	親自在王院舞鶴ヶ池	106m×100m	不整形	○	玉石敷	寺院	II A b	
14	鈴沢池	600m×100~150m	不整形	?	素掘り	?	II?c	
15	白山社池	70m?×50m	不整形	?	玉石積	?	II?a	
16	無量光院梵字ヶ池	径120m?	不整形	○建物	素掘り?	寺院	II A c?	
17	柳の御所堀内部地区池	40.5m×32.4m	不整形		素掘り?	邸宅	II B c?	I期一滞水性、II期一流水?
18	猫間が淵跡	約70m×700m	不整形		素掘り			人為的壁面検出、湿地か沼?
19	伽羅之御所2次検出遺構			?	玉石	?	??a	
20	志羅山遺跡1 6次池	7.5m×9.5m以上	不整形	○	素掘り	邸宅	II A c	
21	志羅山遺跡6 6次池	25m×17m	不整形	?	素掘り	?	II?c	太田川へ排水
22	毛越A遺跡池	10.5m×9.6m	不整形		素掘り	?	II B c	
23	西光寺蝦蟇ヶ池		不整形?	?	玉石積	寺院	II?a	

第1表 池跡・池状遺構一覧(出典は文末参照)



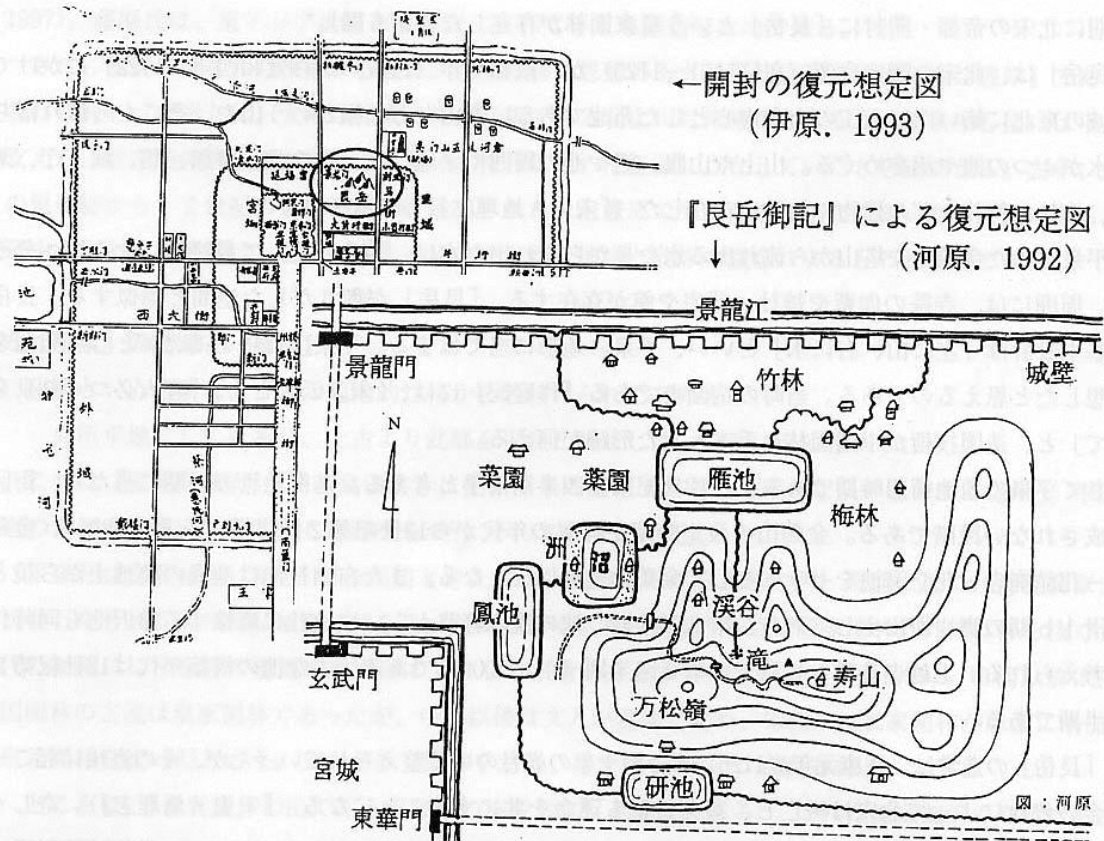
第5図 金鶏山－花館廃寺－花立溜池の関係と奈良県平城京二条大路出土木簡

鈴沢池は、「昔右両社(白山・山王)の前にあり、今其形少く残れり、西を池上と云ひ東を池尻と云ふ」と『平泉旧蹟志』で初めて文献に現れる。池跡は、西の毛越寺方面からのびる谷を埋め立て、岬など入り組んだラインをもつ修景が施されている(八重樫 1997)。「池上」という小字は、金鶏山と塔山の間の谷下の集落にあたり、谷間から流れる沢水が鈴沢池へ流れ込んだと考えられる(及川 1991)。そして隣接する白山社池からの流水もあろう。

また花立溜池は、花館廃寺とセットと考えたい¹⁰。両者は段差があるので、明確な囲いをもたない。しかし、昭和39年の都市計画図では、花館廃寺跡のすぐ南に金鶏山から延びる尾根が土塁状に突出している(第5図)。この形状は毛越寺の西限土塁と類似し、区画としての意識が伺える。これを東へ延長すると、溜池南の直線上の土手へ向かう。東側の土手は曲線を描いており、南北に土饅頭状の高まりがみられ、築山かと判断された。花立溜池の取水は、瓜割清水のように、当時金鶏山東麓から湧き出していた泉と考えられるが、高低差が約10mあるため、滝状の流れが想定される。また千手院方面からの流水も取水可能であろう。金鶏山 - 花館廃寺 - 溜池は、雛壇状の構成となり、三者を視覚的に確認することができる。この光景は、奈良県平城京跡二条大路出土木簡「楼閣山水図」に似ている(第5図)。

以上から金鶏山と花館廃寺、花立溜池が雛壇状に並び、その下には鈴沢池が広がるというロケーションが想定できる。池はそれぞれが独立して存在するのではなく、たとえば花立溜池から白山社池¹¹、そして鈴沢池へと、高位から低位の池へ流水し巡りめぐって最後は北上川へそそぎ入る。

ここで各池の流水経路を復元すると、次のようになる(第2図参照)。



第6図 北宋帝都・開封と名園「良岳」復元図

- 瓜割清水（金鷄山沢水） 花立溜池 白山社池 鈴沢池 北上川
- 独鈷水（塔山沢水） 弁天池 舞鶴が池 鈴沢池 北上川
- 独鈷水 遣り水奥池 大泉ガ池 チゴ沢 太田川 北上川
- 瓜割清水 花立溜池・花立北沢水 無量光院 猫間ヶ淵 北上川
- ?? 志羅山66次 太田川 北上川

いづれも西の聖域から流れ出た水が、いくつかの池を經由して北上川へ流水する。この中には、浄土式庭園を構成するものもある。これらを総合して空から平泉をながめると、広大な苑の光景となる¹²。

3, 宋の名園「良岳」

古代都城にも苑池があった。平城京には松林苑、平安京には神泉苑がある。これらは中国の都城に習ったものである。12世紀、京都は都城のそれとは異なった景観を呈していた。東には二条大路の延長上に白河殿を、南には朱雀大路の延長上に鳥羽殿、東山には法住寺殿があった。私説では、12世紀半ばの基衡期の街区形成は白河地区を見習ったとした（前川 1993, 2000）。いっぽう、斉藤利男氏は鳥羽殿との共通性を指摘する（斉藤 1992）。白河と平泉は周囲の山や川、交通路などの地勢と何よりも法勝寺を真似たという毛越寺の存在が類似する。しかし白河は東山や吉田山、大文字・比叡の山並みが迫るが、街区の中央に池はない。他方、鳥羽は「池広南北八町、東西六町、水深八尺有余¹³」という巨大な池が中心に展開する。さながら「海のけしき¹⁴」であり、地形的に近辺に山はなく遠い山並みを眺望できるにすぎない。平泉はむしろ両者を合体させた感がある。そこで当代の中国に目を転じてみたい。平泉と

近い時期に北宋の帝都・開封に「艮岳」という皇家園林が存在した（第6図）。

「艮岳」は、北宋の徽宗皇帝（在位 1101~1125）が、政和七年（1117）から宣和四年（1122）にかけて、宮城の東北に築いた人工の山を中心とした苑池である。寿山と万松嶺という山や、そこから流れ落ちる水が4つの池や沼をめぐる。山上や山腹、沼や池の周囲や平地には、亭や堂、書館、館、城、庁、薬園、梅林、竹林などの建物や施設が存在した（『宋史・地理志』、河原 1992）。

平泉もまた金鶏山や塔山から流れ出る水や泉から流れ出た水は、池を巡回して最終的に北上川へそそぐ。周囲には、寺院の伽藍や神社、邸宅や館が存在する。「艮岳」が創りだした空間と酷似する。艮岳の基本設計は「左に山、右に水」といい、平泉の地形に当てはまる。平泉は艮岳をモデルとして苑池を構想したと思えるのである。当時の造園書である『作庭記』には、「宋人云」とか、「唐人必つくり泉して」と、造園技術が中国園林を手本とした形跡が伺える。

さて平泉の苑池構想時期であるが、12世紀第2四半期前半と考える。基衡治世の初期に当たり、街区形成されない段階である。金鶏山の設定時期が経塚の年代から12世紀第2四半期（八重樫 1996）、金鶏山 - 花館廃寺 - 花立溜池をセットとして金鶏山造営以後となる。また白山社池は池底の整地土から鏡と常滑1b期の甕片が出土しており、第2四半期。池の流水経路から、白山社に隣接する鈴沢池も同時代と考えられる。毛越寺造営も私見では第2四半期（前川 2000）。主な池の構築年代は12世紀第2四半期である。

「艮岳」の造営は、靖康元年（1126）まで約十年の歳月の中で整えられていったが、その直後に起こった金の侵攻によって北宋は滅亡し、宮苑艮岳も運命を共にすることになる（『宋史・地理志』）。奇しくも靖康元年は日本暦・大治元年（天治三年）中尊寺伽藍落慶供養の年である。東アジア世界に相通った苑池が二カ所、それほど遠くない時期に造営されたことになる。

4、平泉藤原氏の理想世界

平泉には、1、浄土思想、2、神仙思想、3、王城鎮守といった思想が存在したと考える。

まず浄土思想である。浄土式庭園は、「浄土变相図」に描かれる仏殿前の宝池を表現したとされる。平泉は西方浄土を具現化した西の聖域から流れ出る水が、街区をめぐる北上川へそそぐという構図となる。これは、『大無量寿経』に出てくる十力所の池、黄金・白銀・水晶・瑠璃・琥珀・珊瑚・磤磤（しやこ）・瑪瑙・白玉・紫金の池をめぐる状態を連想させる。

次に神仙思想であるが、古代庭園は神仙思想の影響があるという（金子 2000）。当代でも次のような記事がみられる。白河泉殿について「渡御泉殿、御覧新堂地形、遠山之体、前池之様、宛如蓬萊歟¹⁵と、遠山の眺望や池の嶋の様子が蓬萊山のものであるという。また鳥羽の池は、「・・・或摸於蒼海作嶋、或写於蓬山豊巖、泛船飛帆、煙浪渺々、飄棹下碇、池水湛々、風流之美不可勝計¹⁶と、海に浮かぶ蓬萊山をイメージしている。平泉の池には中島が作られる例が多く、これは蓬萊山を意識したものである。大きな鈴沢池から金鶏山や塔山を眺望すれば、蓬萊山や方丈山などの神仙世界が想像できよう。

最後に王城鎮守思想である。「中尊寺供養願文」には、奥州の平和・安泰と白河法皇以下民百姓の安寧のため鎮護国家を祈り、中尊寺を御願寺とする旨が記されている。苑池構造が似ている「艮岳」の造営は、道士のすすめで宮の鬼門にあたる東北の鎮めとしたという（河原 1992）。藤原氏は、平泉全体を仏国土奥州の中心拠点として仏の世界を具現化し、王城鎮守を表明したのであるまいか¹⁷。当時、国家的に北宋仏教を取り入れようとしたという見解もあり（上川 2001）、平泉出土の貿易陶磁器などの存在と併に『吾妻鏡』「寺塔已下注文」に記される中国との相互交流は可能であった（菅野 1994、入間田 1997）。

藤原氏は、東アジア世界をも視野に入れて平泉を創造したのである。

さて、四神に囲まれた平泉中心区は、浄土・神仙思想のもとに苑池空間を現出した「彼岸」である。これに対し「此岸」は、太陽が昇る二高峰の麓である北上川対岸地域となろう。平泉中心区には平泉を支えた一般庶民の居住区が見あたらない。彼らは東の氾濫源に点在していたと想定できる。去年、川東の里遺跡から12世紀の遺構や遺物が検出された。氾濫原でも微高地に居住していた可能性はある。平泉中心区と東方地域は、北上川によって分かれた彼岸と此岸の観念によるものと理解できる。

5、「平泉」の語源と「泉屋」

平泉という名前は、平泉の苑池的性格から名付けられたと考える。

此所平地にして泉あり、上古より此郷を平泉と號せしは、此泉に因て呼べるにや

これは『平泉旧蹟志』「一、泉酒跡」に記す平泉の語源である。¹⁸「平らな泉の湧き出る場所」。中国・唐の宰相李徳裕の別荘も同じ語源をもつ。¹⁹その名も「平泉荘」。

平泉荘は宝暦元年(825)頃の創建と考えられ、洛陽城から三十里の所、周囲十里に、奇花異草、珍松怪石をもって造った私家園林である。園中の珍稀草木の種類の高さは皇家園林以外では群を抜く。宋代の初期には平泉荘の建築や景物はすでになく、遺跡を遺すのみであった(孟 1993)。唐代以前は、中国園林の主流は皇家園林であったが、中唐以後は文人が造園を始め、宋代には私家園林が急激に増加し、皇家園林を凌いだという。文人が多く園林を訪れ、詩を遺している(蕭 1994)。

ところで、『吾妻鏡』に出てくる平泉内の施設名に「泉屋」がある。²⁰これは伽羅御所の泉殿であるという解釈もあるが(金丸 1993)私はローマのファウンテインハウスのような、独立した施設と考えている。平泉にとり象徴的な泉「平泉」のための屋舎である。『作庭記』に「泉は冷水をえて屋をつくり、おほいつづをたて、簀子をしくこと常事也」とある。語源となった酒之泉跡は、旧奥州街道を北へ向かってJRの踏切を渡ったすぐ東にあったという(千葉 1994)。『今昔物語集』(巻31-第13)には大峰山中に迷い込んだ僧が、ある里で酒が湧き出る泉を発見した話をのせる。その泉は「石ナドラ以テ曇ムデ微妙クシテ、上ヘニ屋ヲ造リ覆タリ」といい、「泉屋」の施設が想像できる。

平泉荘は、12世紀にはすでに痕跡を遺すのみとなっていたようであるが、白居易など多くの文人が「平泉荘」について詩を残しており、詩文から平泉藤原氏がその存在を知るところとなった可能性は十分ある。

問題点と今後の課題

「良岳」は皇家園林であり、「事実上、宮城の付属施設で、帝王の離宮・別宮であった」(呉 1984)という見解がある。京都の白河殿や鳥羽殿は、離宮という性格をもつ。白河も鳥羽も開発以前は風光明媚な景勝地であり、もともと貴族の山荘などが営まれていた場所である。平清盛の福原も別業であった。森蘊氏は清盛が瀬戸内海を泉水とする一大構想を練ったと指摘している(森 1945)²²。平泉と同時代に造られた都市的空間は、元来、苑池的性格を有しているのではないだろうか。これについては後考を期したい。

平泉の主要な池を苑池空間の構成要素と考えたわけであるが、古代の「苑」は畑などの生産という実質的機能をもっていたから、苑池を観賞用の空間と決めつけられない。²³藤原氏の理想としては浄土空間、神仙空間を体現できる装置と考えられるが、都市域として発展していった平泉にとり、池の実質的機能を考えておきたい。

平泉は、西の山際が迫る地形ゆえ、池は降雨の時に沢水が急激に都市域に流入しないための水溜の機能を有す。また鈴沢池に近い溝は池に向かって勾配が下がるため、排水施設と考えられる。そして汚染物を北上川へ流すまでに沈殿させ、浄化させるような機能も想定できる。そして反対に、北上川が氾濫したときなどは、鈴沢池や猫間が淵は自然遊水池となり、都市域を保護したものと推測される。

今回は、出土遺物からみた池の使用形態まで論が及ばなかった。理念としての形態と実質機能、そして使用形態の解明こそが、最終的に都市平泉の中の池の存在意義となろう。

都市は人工物であるゆえ造営当初の構想が長続きすることはない。その後の人間の活動により膨張や拡散を繰り返し、破滅することもある。多元的性格をもつ生き物なのである。そういう意味で、本稿は平泉創造の理念を垣間みたにすぎない。平泉の多元性を証明することこそ、「都市」であることの証左となろう。

都市を造る時に、いかに理念にあわせて土地を改変し、周囲の山々や河川を取り込み、自然にさからうことなく敬い、利用してきた藤原氏の都市づくり。「都市と自然」というテーマは、21世紀を迎えた今まさに考えなくてはならない課題である。藤原氏の都市づくりから、我々が学ぶべき点は非常に多い。世界文化遺産登録へ向けた平泉の再生へ向かって、本稿が微力ながらもお役に立てれば、これ以上の喜びはない。

- 1 本中眞氏は、浄土式庭園における周囲の自然景観の意義を明らかにし、当時の自然観を提示している（本中 1994）。造園上どのように自然景観を利用したかは、都市を造るときも同じ問いとなろう。
- 2 近年の古代庭園発掘事例をもとに、古代都城・宮と苑他の関係を指摘する金子裕之氏の研究は、都市論の中で苑池を議論する可能性を示唆していよう（金子 2000）。
- 3 『吾妻鏡』文治五年九月十七日条
- 4 『吾妻鏡』文治五年九月二十三日条
- 5 相原友直『平泉蕃蹟志』「一、金鶏山、園隆寺の鬼門にあたり、高館末申にある山を臺の形に築きけり、基衡黄金を以て鶏の雌雄を造り、此山の土中に築きこめて、平泉を鎮護せしむると云ひ伝えり・・・」
- 6 本中氏は、無量光院について、極楽浄土の無量光院と弥勒浄土の金鶏山を視覚的に結合することにより、自然景観と仏堂・庭園景観の視覚的対応関係が平等院より発展した形態とする。またこの段階で山を浄土とみなす山中浄土思想の影響と、「西」という方角概念の定着化を指摘する（本中 1994、354・355 頁）。
- 7 近世の絵図では金鶏山の麓にある花館廃寺跡に、中央は蔵王権現、左右に子守・勝手社が描かれており、『安永風土記御用書出』にも記載されている。近世の段階で当地は金峰山に擬されていたらしい。私は以前、四方鎮守の西方金峰山を平泉西方の山中と想定した（前川 1993）。近世の伝承はひとまずおくとして、金鶏山を含む西方の山中を、金峰山に擬定できる要素は多いと考える。
- 8 千葉信胤氏のご教示による。
- 9 及川 1994 を基に、現在までの検出例を加えた。
- 10 すでに本澤慎輔氏は、花立溜池について、中島をもち 12 世紀にさかのぼりうる他の可能性を考え、両者のセット関係を图示している（本澤 1998）。
- 11 白山社 1 次調査で花立池方面からの流路が確認されている（及川 1991）。
- 12 現在、毛越寺や花立溜池は、近世に掘削された達谷窟方面から櫻川まで流れる照井堰から取水している。本澤氏は、照井堰の前進が 12 世紀にも存在したと考えている（「照井堰」について『平泉こども歴史くらぶ資料』1994）。12 世紀のある段階からそのような大溝ができて、そこから取水したかもしれないが、今は想定できる流水経路を提示する。
- 13 『扶桑略記』応徳三年（1086）十月二十日条
- 14 『栄花物語』巻四十、紫野
- 15 『中右記』永久二年（1114）四月十四日条
- 16 『扶桑略記』応徳三年（1086）十月二十日条
- 17 平泉藤原氏の歴史的な性格には二面性（中央の貴族・奥州の盟主）が伺え、都市プランにも反映されている（前川 2000）。従

って王城鎮守という意識も藤原氏の表層であろう。

18 「平泉」の語源については諸説ある。

中尊寺開基説 慈覚大師が平泉野にあった寺を中尊寺に移した。「封内風土記」

酒泉伝承 平なところに泉がわき出る 「平泉旧蹟志」

平泉寺説 越前平泉寺と白山の衆徒が移住した。司東真雄「岩手の古代文化史探訪」

については、平泉寺よりも「平泉」の呼称が古いという見解である（佐々木 1999、187 頁）。

19 「平壤出泉、広不遽尋、而探則盈尺」徳裕「靈線賦」の序文（孟 1993、67 頁）。

20 『吾妻鏡』文治五年九月十七日条

21 古典期アテナイの都市化に伴い、ペイストラスト家が水の供給に関心を向け、水道や泉屋を建設したという。泉屋は公共の泉水、吸水場であり、fountainhouse と呼ぶ（E・J オウエンズ、松原 1992）。

22 福原新都は「都市全域に亙って風致計画を樹立し松陰御所、月見の浜御所なるものが海浜近くに設置され、附近の寺江、住江には海水に釣殿を構へて船着とし、又遠く巖島神社殿は之を泉水中の庭園建築と見なした」という。

23 河原氏は良岳の造営背景に、「籠城と洪水避難地がある」と指摘している（河原 1992）。

引用・参考文献

- 浅川滋男 1996「板に書かれた桜閣山水図」田中琢編『古都発掘』岩波新書
- E・J オウエンズ
- 松原図師訳 1992『古代ギリシア・ローマの都市』、36 頁、国文社
- 伊原弘 1993『中国人の都市と空間』原書房
- 人間田宣夫 1997「中尊寺造営にみる清衡の世界戦略-「寺塔已下注文」の記事について-」『宮城歴史科学研究』第 42 号
- 及川司 1994「平泉の池跡」『柳之御所跡の検討資料』平泉町文化財センター
1991「白山社遺跡第 1 次調査」『泉屋遺跡第 3 次白山社遺跡第 1 次発掘調査報告書』第 27 集
- 金丸義一 1993「寝殿造と水辺」平泉文化研究会編『日本史の中の柳之御所跡』13、18 頁吾川弘文館
- 金子裕之 1999「宮と後苑」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』
2000「宮廷と園池」『シンポジウム いま探る古代の庭園』奈良大学
- 上川通夫 2001「中世仏教と「日本国」」『日本史研究』463
- 菅野成寛 1994「平泉出土の国産・輸入陶磁器と宋版一切経の舶載—二代基衡と院近臣—」『柳之御所跡発掘調査報告書』第 38 集 351、362 頁
- 河原武敏 1992「宋代の良岳に関する二三の考察」『日本造園学会関東支部大会研究・報告発表要旨』第 10 集
1994「海を渡った園林—園・苑・園から日本の庭園へ」『月刊しにか』5-2
- 呉涛 1984『北宋都城東京』5 頁、川南人民社
- 佐々木邦世 1999『平泉中尊寺—金色堂と経の世界』187 頁 吉川弘文館
- 斉藤利男 1992『平泉—よみがえる中世都市—』182~193 頁 岩波新書
- 簾黙 1994『中国建築史』中国歴史叢書 19、187・190 頁 文津出版社
- 高橋富雄 1978『平泉—奥州藤原四代』98~103 頁 教育社
- 千葉信胤 1994「ひらいずみの伝説探訪 ひらいずみの名泉（三）」『広報ひらいずみ』No44810 頁
- 仲隆裕 1997「平安京の園池」『都城研究の現在』19 頁、おうふう
- 本澤慎輔 1988「平泉遺跡群の立地と都市構成について」『中世城郭研究』12
- 前川佳代 1993「衣関孝—都市平泉の構想—」角田文衛先生傘寿記念会編『古代世界の諸相』晃洋書房
1993「平泉の鎮守」『古代文化』第 45 巻第 9 号
2000「平泉の都市プラン—変遷と史的意義」『寧楽史苑』45 号
- 孟亜男 1993『中国園林史』中国歴史叢書 2、66~69 頁 文津出版社
- 森蘊 1945『平安時代の庭園』117~118 頁 桑名文星堂
- 本中眞 1994『日本古代の庭園と景観』吉川弘文館
- 八重樫忠郎 1996「岩手の経塚」『東北中世考古学会発表資料』
1997『志羅山遺跡第 52 次発掘調査報告書』第 67 集

第一表「平泉検出の池状遺構」報告書類出典

- 1 平泉遺跡調査会 1963『中尊寺一発掘調査の記録 - 』中尊寺
- 2 平泉遺跡調査会 1963『中尊寺一発掘調査の記録 - 』中尊寺
- 3 八重樫忠郎 1998『特別史跡中尊寺境内内容確認調査報告書(Ⅱ)遺構編』第69集
- 4 板橋源「岩手県西磐井郡平泉中尊寺金色院境内」『考古学年報』
- 5 平泉郷土館編 1991『平泉の埋蔵文化財』
- 6 未調査
- 7 本澤慎輔 1997『岩手県平泉町文化財調査報告書』第63集
- 8 平泉町教育委員会 2000『花立Ⅱ遺跡第13次調査区現地説明会資料』
- 9 藤島刻台郎 1961『平泉一毛越寺と観自在王院の研究』東京大学出版会
『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書』第2・5・7・10・12・14・26・50集、平泉町教育委員会
- 10 本澤慎輔 1987『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書』第10集、平泉町教育委員会
- 11 未調査
- 12 藤島亥治郎 1961『平泉一毛越寺と観自在王院の研究』東京大学出版会
- 13 藤島亥治郎 1961『平泉一毛越寺と観自在王院の研究』東京大学出版会
- 14 八重樫忠郎 1995『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』第51集
1995「鈴沢の池跡第1次」『平泉遺跡群発掘調査報告書』第47集
1997『志羅山遺跡第52次発掘調査報告書』第67集
本澤慎輔 1993『白山社遺跡第2次発掘調査報告書』第30集
- 15 及川司 1993「『平泉遺跡群』の発掘調査」『古代文化』第45巻第9号
1994「平泉の池跡」『柳之御所の検討資料』平泉町文化財センター
- 16 文化財保護委員会 1954『無量光院跡』吉川弘文館
- 17 三浦謙一・松本健速 1995『柳之御所跡』県埋文228集
- 18 本澤慎輔 1987「猫間が淵跡第1次」『平泉遺跡群発掘調査報告書』第11集
本澤慎輔 1988「猫間が淵跡第2次」『平泉遺跡群発掘調査報告書』第13集
本澤慎輔 1990「猫間が淵跡第3・4次」『東北電力鉄塔用地発掘調査報告書』第20集
- 19 本澤慎輔 1987「伽羅御所跡第2次発掘調査」『平泉遺跡群発掘調査報告書』第11集
- 20 鈴木江利子「志羅山遺跡第16次発掘調査」
1993『志羅山遺跡第13・15・16・17・18・20次発掘調査報告書』第35集
- 21 羽柴直人 2000『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』県埋文312集
及川司 2000「岩手・志羅山遺跡」『木簡研究』第22号
- 22 三上昭・昆野靖・菊池郁雄
1980「毛越A・B・C遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』V 県54集
- 23 未報告

付 記

本稿を成すに当り、奈良文化財研究所の金子裕之先生には懇切丁寧な御指導と御助言を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

平泉文化研究年報 第1号

平成13年3月31日発行

発行 岩手県教育委員会

岩手県盛岡市内丸10-1

編集 岩手県教育委員会事務局文化課

印刷 杜陵高速印刷株式会社

盛岡市川目町23-2